

## 初期の広津和郎

——センチメンタリズムの排斥——

楳 林 滉 二

### 一

初期の広津和郎における思考の中核は、徹底的な「センチメンタリズム」の排斥にあった。思想の誘惑や、思想の暗示にとりつかれ、自己の正しい判断の眼を曇らせてしまう「（ほんとの意味の謙遜のかけた）自己感心」（「自己感心の恐ろしさ」大正五年二月）におちいった人達や、思想の呪縛にあり、いとも安易にその中におぼれこむ「（認識不足のセンチメンタルな）自己感情陶醉家達」（「蚤と鶏」大正六年八月）に対して、はげしい嫌悪感や、時として、敵愾心に近い感情さを示しているのである。

そういう意識の動きは何から由来するのか、また、それは何を意味するのか、そして、それはどこへゆきつくのか、それを考察するのは、きわめて興味あることに思える。この論では、そういったセンチメンタリズムを主題として論ずる初期の広津和郎を追求してみたい。

### 二

初期の広津和郎を語るには、その発想の土台に生活環境が大きく位置していることをないがしろにするわけにはいかない。そこには、重要な三つの要素がある。一つは父・母の問題であり、一つは兄の問題であり、一つは妻の問題である。主として、「年月のあしあと」

（昭和三十六年一月）や、「神経病時代」（大正六年十月）、「師崎行」（大正七年一月）、「やもり」（大正八年一月）、「波の上」（大正八年四月）といった初期主要作品、さらには「傷痕」（昭和二十六年十二月）、「兄弟」（昭和二十七年九月）といった作品を中心に、それらを少しみていきたい。

明治初頭の一時期、文壇の一翼を担った広津柳浪は、その子広津和郎の少年・青年期にはその全盛を過ぎ、逼塞期に入っていた。柳浪は極度の潔癖さをもって筆を執らない生活を続けていた。従って家はきわめて貧しく、加えて、和郎は実母と早く死別し、継母に育てられた。「年月のあしあと」の回想によると、大学へ通うための電車賃さえことかき、一時間もの道を歩いてかよったりもしたとのことである。一方、父は子供達を盲愛し、その後妻に対してつらくあたり、家の中はつねに暗かったようである。そういう父母のいさかいの中であって、和郎はすでに十七、八歳の頃から父に対して母をかばえとよく意見したと述懐している。（「年月のあしあと」）  
いかに貧乏の中にあっても節を屈せず、「泣言」や「弁解」一つしなかつた父の態度を広津はきわめてありがたいとは思いつつも、その父に対して、全面的には頼りきれなかつたのである。「神経質で、一本気で、感情の昂まりを抑えるとか、横にそらす」ことにかけて、およそ不向きであつた父柳浪と、同じく「正直で神経質な」母との間に立ち、家中がつねに「神経と神経との火花を散らす」よ

うな状態にあった中で、何とか父と母との間をとりもとうとする広津和郎の生育環境はまことに寂しいものであったといつてよい。彼は、父に對して、いわゆる世間一般の父子と逆の關係に早くから立たねばならなかった。子を信じ、理解し、広くカバーしてやる親の役目は、この場合は、むしろ、広津和郎の役目だったのである。ここに一つの奇妙な倒錯關係がある。

この倒錯關係は兄の場合に、より特徴的に示される。兄のことは、後、昭和二十六年十二月に発表された「傷痕」の中に、幾分の悲しさど怒りをこめて、次のように述べられる。貧しさの中で、意志の弱い兄は、継母を欺いて盗みを働き、さらには無責任に人を騙し始める。それを知った父や母がいくら意見しても聞かない。果てには、悪質な女にひっかかったり、警察に拘引されたりして父を苦しめる。そういう兄に對して、絶望的になった弟、広津和郎は、ある時、突然兄の身体に馬乗りになって兄の首を絞めはじめたのである。

「私は兄を殺し、自分も死に、この厭な世の中から消えてしまひたいと思ひ、夢中になって兄の首を絞めた。兄は死にも狂ひに私に抵抗して、私の右の二の腕に噛みついた。兄に噛まれた私の腕は肉が喰ひ取られた。」

(「傷痕」)

物音に驚いてかけつけた父はその有様に呆然としてゐる。絶望的な父と和郎、そして兄。何とも悲しい寂しい記憶ではないか。それは彼がかぞえて十八歳の時であった。

彼はこう回想する。

「それは私の生涯の中で一番悲しい出来事であった。今日振り返って見ても、私の悲しみの感情の中で、その出来事は最も色濃くその感情の中心に横たはってゐる気がする。」

(「傷痕」)

この兄は、後にも、「秋」(昭和二十七年五月)、「兄」(昭和二十七年八月)、「兄弟」といった作品に、まったく不可思議な存在として出てくる。兄の無責任さに對して、彼はつねに「父に心配をかけない少年」でなくてはならなかった。「兄弟」の最後に、その懐いを広津はきわめて自嘲的に述懐する。

「兄は中学時代から、所謂不良少年の傾向を帯びてゐて、始終父に心配をかけたが、それが私を父に心配をかけない少年にさせてしまったのである。(中略)兄が尻拭ひをしなければならぬやうな事をしでかすので、私は兄の尻拭ひをしなければならぬ事になつて行つたのである。兄が先鞭をつけてしまふので、私は兄と同じ道を行けなくなつてしまつたとも云へる。

一遍ぐらゐ父や兄に尻拭ひをして貰ふやうな事をしでかしてゐたら、何かもつと楽しかつたであらうのに。」

それは、まさに、典型的な賢弟愚兄の育ちであつた。この父と兄の思い出は、広津和郎の成長過程に大きな影響をもたらしたといつてよい。世間一般にいう父兄であり、保護者である立場に、子であり、弟である広津和郎が立たなければならなかつたのだ。「自分に手に了へない不始末の尻拭ひを誰かにさせて、一目散に逃げ出して見たい。」(「兄弟」)、それが広津和郎には出来ないのである。彼は、筆を下さぬまゝ頑固に片意地な生活を送る父に對して、精神のみならず、経済的にも大きな支えにならねばならなかつた。精神的に広津和郎が広津家の柱であるように、経済的にもそうであつたのだ。大学を卒業した後には、広津家の経済はほとんど彼の肩にかかつてくるのである。

それらの結果、彼は早くから客観的な眼をもたねばならなかつた

と云つてよ。彼は、早くから被護者ではなく保護者の眼をもたねばならなかったのだ。いわば、大人の眼を持つべく余儀なくされたのである。彼は、中原中也や、太宰治等のような、だだっ子の眼がもてなかつた。彼が崩れると広津家は瓦解するのである。この、早くから立たねばならなかつた保護者、庇護者としての立場は、当然、彼の文学的営為にまで大きく影響することになる。彼はだだっ子を容認し包括する立場にある、「己れを忘れた手前勝手、野放図もない放心、無邪気、天真爛漫。」（「兄弟」）は、彼の行為ではなく、彼はそれを穏やかに取りさばく立場にあつたのだ。後の、彼の資質を論ずるに、これは忘れられぬ事実である。

加うるに、彼には妻の問題があつた。「神経病時代」、「師崎行」、「やもり」、「波の上」といった彼の初期主要作品の中心を占める課題は、妻との確執である。

ふとした過失から関係した女を、どんなに愛そうとしても愛せなから。理屈では、いかに哀れに思い、いかに不憫に思つても、どうしても駄目なのである。一つの不可思議な感情の深淵を彼はそこにみる。

「「ああ、一体何が責任だ？」と彼は妻の女優髻と顔の白粉とを見ながら考へた。「俺には一体何の目的があるのだらう？俺たちの家庭生活には何の理想があるのだらう？そして子供だ！」定吉はさういふ間に子供が成長して行くといふ事実が恐ろしくなつて来た。彼は何か訳の解らない空洞を眼の前に見たやうな気がした。……」

（「神経病時代」）

「再び妻に会ふのが苦痛だつた。赤ん坊の顔を見るのも苦痛だつた。此気持をどうしたらいいだらうと思つた。——そのくせ妻を可

哀さうに思ふ気持は、唯暮るばかりだつた。そして可哀さうと云ふ事が、僕の固い気持を軟かにする事とは、やはり全然別に働いてゐた。」（「波の上」）

そして、次のようにも思う。

「併し自分は生れながらにこんな残酷な男ではなかつたんだ。自分は正直者だつたのだ。自分がこんな風に残酷になつたのは自分の罪ではないんだ。その大きな自分以上の存在が自分をこんな風にしてしまつたんだ……」（「師崎行」）

しかし、彼にとつては、妻との感情の齟齬を、そういつた「大なる存在」、それは運命といつていいかもしれぬし、神の意志といつていいかもしれぬのだが、それに責任を移すのは賛成できないように思える。「薄いた種は自分で」と思う。

彼の、その間の倫理的な観念の一つは、「自由と責任とについての考察」（大正六年七月）に追求されている。彼は、人間の責任の問題について、「私は思う。人間は絶対に自由である。人間は如何なる事をもゆるされてゐる。神はそれをみんな人間にゆるしている。神は神を呪う事さえも人間にゆるしている。この絶対自由を与えられてゐるからこそ、人間は責任を感じなければならぬのである。」とのべる。すなわち、絶対の自由を感じるということとは、また、絶対の責任をもかんじなければいけないということになる。「我々のする事が自由であるがゆえに、その結果も亦我々の上に当然帰つて来なければならぬではないか」、彼はそのように考へる。これは、単なる抽象論でなく、妻との問題になやみぬきつつ、そのなかで自分にきびしく言いかけたモラルのことばなのだ。だが、ひつきょう、それはどうすることもできない世界であつた。無意志な兄に對

して意見すると、兄は石のように黙りこんでしまい、二人の間にまるで別の世界が出来上ってしまったといった、たえきれぬような焦躁感をもたらす意識断絶の世界を、妻の場合には、それにもまして手ひどく経験したのである。それは、いわば、非条理の感覚と、いってよまろう。自分がいかに努力し、いかにその全精力を傾けても、どうにもならぬ世界があるのだ。彼はそれをふたたび痛切に知らされるのである。

このような、非条理を凸出させた彼の生活環境が、彼の成長過程に大きく影響を及ぼしたのは、看過できない事実である。その結果、彼は酔えない人間になってしまったのではないかと思う。自己の感情や考えに対して、簡単に陶醉できなくなったのではないだろうか。現実には、そんなに割り切れるものではないのである。簡単に物事の結論を下せぬ、もっと多様の、もっと不可思議な存在をそこに見出したのではないかと思う。彼は自己の感情におぼれてしまう気持ちはやなれないのである。

結局、二つの要素が彼の中に発生する。すなわち、彼の父の眼でみると、甘っちょろいセンチメンタリズムは苦々しく思える。父はつねに客観的な広い視野をもたねばならない、酔ってはならないのである。簡単な結論づけは彼にはできないのである。そして、一方、彼の、兄や妻を通して感じた意識断絶の世界からみれば、現実とは不可解に思える。従って、これまた自己の安易な方向づけは、彼の中心に、はげしい焦躁感とたえられぬような嫌悪感しか呼び起こさないものである。彼は複眼をもたねばならないことになる。父の目の明晰さと、非常理の感覚から発生する方向探索の目といった、一見、背反する二つの感覚である。こうした複合体から発生するセンチメン

タリズム排斥が、初期の広津和郎の特色と、いいのではないだろうか。

### 三

初期作品群を小説構図の上から追求すると、そういったセンチメンタリズム排斥の立場は、また、きわめて明確になってくる。

「神経病時代」、  
「師崎行」、  
「やもり」、  
「波の上」といったこの期の作品群を読んですぐに気づくことは、それらの作品に構成はあるが、作品そのものから来る感動や感情の高まりが乏しいということである。

こころみに、「神経病時代」を追ってみると、その構成は実に明晰である。十章からなるこの作品は次のような構造をもつ。

一、新聞社の話、二、友人の話、三、家庭の話、四、友人の話、五、一ノ四のまとめ、……（話の前提）。六、友人の話、七、新聞社の話、八、友人の話、九、家庭の話、十、まとめ、……（話の発展）。

きわめて錯綜する内容と多くの問題をもつこの作品も、構成はまことに整って、その乱れは乏しい。がしかし、主人公をとりまく様々の人物の葛藤は、どうしても立体的な映像を我々に与えないのである。

同様なことは、その私小説作品群、「師崎行」、「やもり」、「波の上」についてもいえる。その三作を通読して気づくことは、時間の推移がじつに整然としているということである。あの、妻との暗い記憶をたどっていくこの作品群は、時間的にほとんど寸分の狂いもなく記されている。わずかに、「やもり」の第二章の冒頭、

「学校生活を終つて三年目ではあったが、私はまだ世の中といふものをよくは知らなかった。学校を出た年の秋から、翌年の春、丁度、私が初めて此下宿に来るやうになつた頃まで、半年ほどの間、或新聞社につとめた経験はあるが、(下略)」

の個所が、じつは「学校を出た翌々年の秋(夏か?)から、その翌年の春」と一年ずらさなくてはならないという間違ひがある程度である。

(彼の年譜の上でみると、学校を出た年は本村町に住んでいて、その翌年入営し、新聞社に入社したのはその後であるという事実にぶつかるし、また、この作品の中でも、第三章の「ついその二年前、今遠い海岸に行つてゐる両親と一緒に、麻布の本村町に住んでゐた云々」の記事との照応関係からみても、これは明らかに間違ひである。)

これらのことは、彼の創作がきわめて的確な理筋の上になりたつてゐることを物語る。

形式上から見たこれらの作品を、その内容から追求してみると、今一つ面白いことに気づく。それは、話の内容がひどくストイックであるということだ。きわめて内省的といつていいかもしれない。現実にかつた問題をすべて自己の責任のもとに統括するということである。たとえば、父も兄も妻もきわめて倫理的に取捨された形で記されている。彼が書きたくないと思つたこと、言つたこと、書いていないのである。先の「傷痕」や「兄弟」は前述のように、ずっと後に書かれた作品である。私小説作家の材に最も適すると思われぬあの乱脈をきわめた兄の話が、初期作品にはほとんど記されていないのである。妻の問題にしても同じことがいえる。後、彼は、

大正十三年七月発表の「小さい自転車」に妻の悪口を奔流のように吐き出しているが、ここではそれを見事に内省の壁でとりまいてゐる。

彼は次のようにストイックに自省する。

「ところが、やはり総てがうまく行かなくなつて来た。僕の妻と両親との間がりまく行かなかつたのだ。いや、これは勿論両親の罪ではないと思ふ。又僕の妻の罪でもないと思ふ。何よりもいけなかつたのは、やっぱり僕だ。」(「波の上」)

こういつた自省の背景にさきほどの保護者としての大人の眼が働いてゐるといつてよいのではなからうか。責任者として、保護者として、破壊的、破滅的行為はできないのである。いわば、彼は、醉えない、歌のうたえない作家になることになる。加うるに、前述の非条理の感覚は、彼に現実との断絶を余儀なくさせる。彼は御念に走らざるをえなくなる。現実をいくら追求しても、追求しきれぬ何かがある、いくら妻を理解しようとしてもしきれぬ何かがある、いくら兄を容認しようとしてもしきれぬ何かがある。そういう感覚を通して、彼は、漸次、現実との乖離を肌身の問題として感じていくのである。現実が不可解であるとしたら、御念追求で物事を弁別する機能を作りあげねばならない。時として、それは虚構の世界に入りこんでいくことになるのであるが、彼においても、その傾向が少しずつ明確化してくる。それを最も特徴的にあらわしているのが、「神経病時代」や「死児を抱いて」(大正八年四月)である。しかし、御念に基づく小説構成は、作品構造を明確にするが、反面、つねに作品に、今一つの迫真性を与えないものにもする。「死児を抱いて」は「師崎行」「しもり」「波の上」であつた自分の、妻

に対する感情を、一步退いて、女の立場から追求した作品であるが、これは、一応、私小説作品群にはない面白さを保持している。だが、観念の小説を作成する作者の姿勢は、すぐに読者に敏感に反映してくる。その結果、その作品は、それ以上の感動と、それ以上のリアリティを生まない。作者の着意があまりに如実に顯示されるのである。それは、彼の父柳浪の深刻小説の評価にも係わってくるもので、面白い類似といえよう。

しかし、こういった現実との乖離の故に、この観念の世界を追求する者は、追求すればするほど実測不可能の深淵に身を投じなければならなくなる。「神経病時代」に頻出する「何のために」という形而上学的な内省、ぐせは、それを顕著に提示しているといえよう。

「神経病時代」にみられる意識構造は次のように考えられる。妻や兄に対する無意識的な非条理の感覚は、その累積により現実の意識に改組される。その非条理の感覚は、くり返し体験することにより、いつのまにか広津和郎自身の体質の一部に化してくるのである。現実認識の方法として、それは広津和郎の感覚の一部になるのだ。

ついで、現実を意識されたこの非条理の感覚は、さらに自分の観念に対して強力な発言力を得るということになる。すなわち、非条理の認識が観念に走らせ、観念の追求が、ますます非条理の認識を深めていくという、まことに、合せ鏡の如き意識構造を彼は作りあげていくことになる。かくして、彼の意識の中には、ほとんど宿命的な観念の自転の世界が作成されていくのである。「神経病時代」の「何のため」の追求は、そういった意識の世果を如実に物語って興味がある。

ちなみに一例をあげる。

「何のために、何のために？」と定吉は腹の中で考へた。「みんながみんな、意見を持ってゐないのだ。(中略)何が何んとして正しくて、何が正しくないかを実際は少しも知りたくないのだ」(中略)すると定吉の頭に急に鋭い自己反省がキリキリと痛い程襲って来た。「だが俺は、この俺は……」と彼は考へた。「俺は一体それなら何の意見を持ってゐるのだ？俺は一体どんな生活をしてゐるのだ？」それは彼がいつも感じてゐる事ではあるけれども、この時位鋭く感じた事はなかった。彼は両手で頭を押へた。頭が割れるやうに痛くて、眼がくらくらとした。――」(「神経病時代」)

もし、こういう世界を彼が彼なりに全力を傾注して追求していたら、我々は、我々の前に拡がるこの不可思議な世界に対する一つの突破口を得ていたかもしれないと思うのである。だが、残念なことに、広津は、妻との問題が離婚という形で整理されると、その追求を中断してしまふ。この問題は、彼において、実にスムーズに回避されたかのようにみえる。こういった意識の追求が、彼の中でいつ切れたか不明であるが、不思議といえれば不思議なことである。

この回避の原因は何かを考えるのは、今の場合、さして意味のあることではないかもしれぬが、牽強付会的な意味あいで追求するならば、次の三点が、その大きな要因といえるかもしれない。一つは責任の意識である。ひいては、先の保護者の意識ともかゝわってくる。こういった世界の追求が、えてして、意識の深みにはまることから起る、ひよわな観念の世界の信奉者におちいりやすいのを、聰明をもってなる広津和郎が、どうして看過することがあろうかと思ふのである。二つには、むしろこの方が大きな原因となると思ふのであるが、妻との現実の離別である。それは、彼の眼前の一番大きな

非条理的な存在物からの回避を意味する。ほとんど体質化したかみえた非条理的な感覚が、この回避を通して、いつのまにか、強烈な、生得の聰明さと性格の強さによりうち消されたのではないかと思う。三つには、「わが心を語る」（昭和四年六月）の中の「抱月の幽霊」の中でしみじみと彼が述懐する世界にも関係してくる。あの、抱月の「（人生に）疲れた、虚無的な眼の魅力」からの脱皮の思い、あれほど自分を魅了した虚無の世界と別れねばならないといった思い、そういった、意識改変の意識が、ここでも強く働いたのではないかと思うのである。

ともあれ、こういった観念自転の世界の追求が我々に生産的な指針を与えるかどうかは、一応、さておくとしても、古譚においてその世界を追求した中島敦や、さらには、あのフランツ・カフカの「変身」や「城」の世界を、はしなくも私は想起するのである。そして、それ故に私は、広津のかくも安易にみえる問題追求回避を、広津の、その聰明な資質を思うにつけても残念に思うのである。それは、後の異邦人論争における彼の発言に対する私なりの不満にもつながる。

#### 四

しかし、こういった、小説における世界の物たりなさが、評論の場となると、次のように少し異なった様相を示してくる。彼の醒めた感覚は対象を実的確に切りとっていくのである。父としての姿勢からあらわれる冷静な、そして、物事を正しく見よとする眼は、彼に鋭い、きびしい力を与える。彼の醒めた、物事を客観的に見ていく眼には、対象のいろいろな側面がよく見えるわけなのである。

対象を客観的に位置づけることができるわけである。これは批評家としての彼にすばらしい機能を与えることになる。

彼は酔えないのであり、そして、それ故に酔ったものを冷静に判断できるわけである。彼は簡単に酔ってしまうセンチメンタリズムに對して、激しい攻撃と、時には恐ろしいほどの呪詛を投げかけた。「怒れるトルストイ」（大正六年二月／三月）の中の激しいトルストイ攻撃もその一つである。トルストイの文の隅々には「選ばれた人」の意識がみなぎり、その意識をもって、民衆にお節介を云ったり、民衆に對して腹をたてたり、教訓したりして、つまるところ、トルストイは独断をまきちらすかみえる。そういう独断や思いあがり、広津にはたえられなかったのである。そういう、自己の思想に安易に陶醉したセンチメンタリズムに對して、激しい反発をかんずるのである。そして、その對置として、「志賀直哉論」（大正八年四月）をおくとしたら、事情はもっと明確になるだろう。彼に對して、志賀は冷静な、冴えた、つねに敬意を払うべき存在だったのである。もちろん、「志賀直哉論」も、つまるところ、志賀直哉を、今一つ高次の「センチメンタリズム」、すなわち、「複雑を通り越して単純を求める一種独得」の「センチメンタリズム」として批判しているのだが、それは彼の欲求の階段のさらに一段登ったものとして認知すべきであろうと思う。

一方、先述の妻や兄に對する非条理的に近い感覚は、彼に、先の観念の世界の裏がえしとしての、今一つ重要な要素をもたらす。すなわち、こうした非条理的に近い感覚をもつことは、とりもなおさず、自己の信頼できるものは自己の体験、感覚でしかないという、素朴な意味での実感信仰を呼びおこすということである。彼はこう述べ

る。

「感情には予定がつけられない。そのつけられない筈の予定を、私は無理につけようと思つてゐたのである。そしてそれが、自分の人間としての責任だと思つてゐたのである。」（「やもり」）

論理で説得できない世界の存在を感得するということは、論理にたよつた概念や抽象の無力性を体得するということになる。別言すれば、感情の不定性を発条とする、抽象化や概念化への欲求が、その意に反して、いとも簡単に崩壊してしまつた結果、その反動として、最初の現実感覚をこえた、より強烈な実感がえりや、より根強い実感信仰が出現してくるということになる。

彼の初期評論における重要な基調はそこにある。彼はあらゆる概念や抽象や、そして範疇を嫌悪する。

「概念で物を極める程恐ろしい事はない。」（「愚劣な吉右衛門論」大正五年一月）

「これは非常に危険である。Aの範疇からBの範疇へ、Bの範疇からCの範疇へ……私は身震ひする程此範疇が嫌ひだ。」（「相馬御風氏の「還元録」を評す」大正五年三月）

彼のこの実感への傾倒は、彼の評論活動において、きわめて効果的な力を発揮することになる。「作者の感想」（大正九年二月）に収められた彼の初期評論の追求はそこよりはじめられなければならない。これらの初期評論の論理は次のようになる。

まず、彼はセンチメンタリズムを徹底して排斥する。「志賀直哉論」における彼の論述はすでにみたが、ちなみに、他の「センチメンタリズム」排斥論を二、三例示してみる。

「—あなたは何時でもセンチメンタルでした。あなたはよく思想

を発見した。思想を考へ出した。そして感激した。思想と云うものは発見したり考へ出したりするものではなく、自然に湧いて来なければならぬものなのです。」（「相馬御風氏の「還元録」を評す」）

「かうした認識不足のセンチメンタルな、自己感情陶醉家達を、私はやはり好かない。」（「蚤と鶏」）

「ビリ、と舌を刺すやうな芸術的な味、新しい冷たさの手触りがあつた。そしてセンチメンタリズムの絶無なのが快かつた。」（「田園の憂鬱」の作者」大正七年十一月）

そして、このセンチメンタリズムへの対置として、彼は、「無邪氣」（「相馬御風氏の「還元録」を評す」とか、「こども」）、「処女性」（「武者小路氏の「処女性」大正七年一月）とか、「はだか一貫」（「或批評家達に与ふ」大正七年十二月）を置くのである。簡単に範疇や思想や概念にとらわれない無垢の感覚を重要視するので、彼はそれを実感というのである。

「私が焦躁が如何に人生に害があるかを説かうとするのは、私自身が始終此焦躁に苦しめられてゐるからである。此焦躁が私の生命を害して行く事を、私は始終経験してゐる。私はこの経験を説かうとするのである。」（「如何なる点から杜翁を見るか」大正六年七月）

「武者小路氏は自分は人道主義者であるかどうかは知らない。併し自分は唯かう感じてゐると答へて、彼の実感についてのみ語つた。その彼の答へた答へ方は、實際一番正しい答へ方だつたのである。」（「或批評家達に与ふ」）

こうして、彼は実体から乖離した意識や觀念の動きを激しい調子で譴責する。彼は形でなく中味へ入ることを要請する。大切なのは



「深み」(「相馬御風氏の『還元録』を評す」)の感覚であり、「厚み」(「トルストイとツルゲエネフの決闘」大正五年一月)の感覚なのである。そのことはとりもなおさず、明白な抽象化を排斥し、物事を簡単に処理することを嫌悪することにもなる。

「私は此人生の問題と云ふものは、一つ一つにさうびちりびちりと解決を施して行つて了へるものではないやうに思ふ。」(「菊池寛氏に答ふ」大正八年五月)

「どうか文学は二十世紀の簡便法ではなく、十九世紀の混沌法(?)にとどめて置いて、そこからもっと進んだ道を見出すやうにしたいと思ひます。」(「奈良より」大正八年八月)

その結果として、彼は強烈なりアリズムの眼を領有できたのではないかと思うのである。この実感によつて、批評はかなりの有効性を發揮する。現実にならざるやうなことが、何よりも多大の説得力をもつ、何よりも評者の生々しい息吹が感じられる。佐藤春夫の「退屈読本」と共に、彼の「作者の感想」が大正評論の双壁と称されるゆえんでもあると思う。

## 五

ともあれ、かくして、彼のいちはやく獲得した、大人の眼と非条理の眼を併有した複眼は、つねに両刃の刀として働く。その眼の故に、小説においては、えてして倫理的になり、觀念に走らざるをえないし、また、その眼の故に、評論においては実感に走らざるをえない。まことに奇妙な矛盾発想が発生するのである。そして、その立場が、じつは彼の厚い防壁になつてゐることも事実である。

作家としての彼を論じようとする時、評論家としての彼が我々の

前にカーテンを揚げ、評論家としての彼を衝こうとする時は、作家である広津が我々を厚い幕で遮る。評論家としての広津の冴えた眼が小説を面白くないものとしたと広津を補佐すればいいし、作家としての彼の立場が、評論を厳密なものでなく、もっと自由なものにしたとして広津を救うこともできるのである。そして、つねに我々は彼に対して何らかの隔靴搔痒を感じるのだ。

彼の存在は、そのどちらの側面にも防壁をおいてゐることになる。例えば、觀念や構想においてその小説が広津の半面をうけもち、実感や実体をみることににおいてはその評論がのこり半面を補うのだ。

その結果、広津和郎の総体は、そのどちらへも傾斜せず、一応、偏在しない個体として、我々の前に大過なく存在するということになる。広津の総体の重量はそこにあるのである。

しかし、この大過なく存在することが、じつはまた、広津に対して、それ以上の蠱惑を感じしめないものにもなる。もしくは、そういう魅力ない存在となる危険性を感じさせることになつてくるのである。初期評論群に、すでに、そういう危険性を感じさせるものがある。例えば、相馬御風に対する彼の論及は、死屍を鞭うつといつた形のいわずもがなの感を我々に与えるし、「武郎氏の手紙と実篤氏」にある有島武郎攻撃にしても、有島の「」而して存分に失敗しようと思つてゐます」ということばに対して、敏感に反応して、「(そういうことを書きうる氏の心持は、氏の知識によるものであるが、)そんな知識は人間の生活の上に何の必要もないものである。」と簡単に説く態度にも、その危険がみられる。有島の悲痛な叫びを、広津は単なる自己の実感の総体でしか反応できないのである。

広津は実体や実感を信仰することより論を起す。そして、それ故に非凡な有効性を發揮するのであるが、それはすぐ、今一つの欠陥につながる。すなわち、広津の実感の射程外に位する問題に対しては有効性をたないものである。今の有島批判もその一つであろうと思われるし、「田園の憂鬱」の作者」における谷崎潤一郎批判もそれに近い所にあると思われる。

彼は谷崎の作品を「有り得る」に止まって「有る」実感まで来ない。」という。それはそれなりに卓越した意見であるだけに、それにもまして、その「有り得る」の意味内容の追求がほしいのである。そこに谷崎の意味があるとしたら、まず、広津の谷崎譴責はそのことの分析より入らねばならないのではないかと思うのである。

彼は、そこにおいても、自分の実感の総体でしか対決しない。これらのことは、彼における、ロマン・夢の欠乏にも連なる。醒めた眼は夢を追えない。しかし、小説は本質的にロマンでもあるのだ。

そして、今一つの側面として、彼の実感追求は、より以上の徹底化をさまたげるといふ結果をもよびおこす。それは、後の「風雨強かるべし」（昭和八年八月／昭和九年三月）において感じた私の不満ともつながってくるのだが、彼は実感を信ずるあまりに、実感に裏切られるという皮肉な結果さえ生ずる気配があるのである。少し誇張していえば、実感という個人の体験や心事に固執することは、論に強い説得力を与えると同時に、負の価も与えかねないということである。すなわち、範疇や概念を嫌うあまりに実体や実感に論の立脚点を置くということは、また、とりもなおさず、その実感を範疇化するという奇妙な結果をも呼び起こすことになりうるからである。幸いにして、妻や兄に対する実体験は彼の実感の振幅を大にし、

あの「怒れるトルストイ」の鋭さを生んだと思うのであるが、また一方、その実感の追求の浅さが、カミュ論争における甘さに連なるような気がしないでもない。

同じことは対社会的な範囲でもいえる。彼の小市民に対する追求は、彼の小市民としての実体験に支えられて強いものをもつが、一方、実社会の他の面に存在する今一つ強烈な壁に対する認識の欠乏が、彼の有島批判の物たりなさに通ずるのではなからうかと思うのである。それを、より如実に物語るのが、あの「宣言一つ」をめぐる論争」における広津の的はずれの反論である。

## 六

彼は実感に即し、実感以上のものを語らなかつた。それは正しくはあるが、また、それ故の不満も感じるのである。彼の実感の射程内で有効であることは、とりもなおさず、彼の実感の射程外の事物に対する無力性にもつながる。実感がえりの結果生じた、彼の強烈な実感信仰は、その評論の場で、如実にその功罪を披露するのであった。

その反面、父的視点をもつということは、実感をこえた客観的視野をもつということにもなるが、それが父的という限界にあることにより、おのずとその有効性の範囲も限られてくる。すなわち、つねに客観的視点に立つことにより聰明な広い視野をもつのであるが、その父的立場の故に生ずる、ストイックな立場が、より以上の徹底化を抑制してしまうので、つまるところ、徹底化より生ずる強烈な個性に出あわないということにもなるのだ。

ともあれ、このまことに相剋した形の矛盾発想の下に、広津和郎

は、その認識構造の基点を「センチメンタリズム」の排斥というこ  
とにしほるのである。こういった発想の基軸となるものとして、彼  
は、謙遜の欠けた「自己感心」や、思想の誘惑におほれるセンチメ  
ンタリズムに対する譴責をおいたのである。結局、そのことが、初  
期の広津和郎に対する評価の中軸ともなる。すなわち、センチメン  
タリズムを恐れるが故に物事を正しく冷静に判断できるのであるし、

その反面、それにおほれまいとするあまりに、かえって彼の全容は  
強烈さや深淵さを喪失していくということにもなる。

初期の広津和郎の評価はそこに帰一するといえよう。初期の広津  
和郎は、そこにおいて、その意識の改変を余儀なくされているとい  
えはしないだろうか。